

本学職員の研究業績目録

これは創立(1932年)以来1957年10月までの25年間における本学職員の論文、著書目録である。共著論文は最初の研究者のところに記載する。

I 現職員の一部

宮道悦男

- 宮道悦男, 吉田 裕: ハマメリス属植物葉の生薬学的研究(日本学術協会報告 **7**, No.2).
- 宮道悦男, 杉浦 衛: 重曹がデアスターゼの糖化力に及ぼす影響(薬剤部長会年報 **11**, 38 (1952); 本誌, **2**, 14 (1952)).
- 宮道悦男, 野村新太郎: くすのき科植物種子油脂の化学的研究(薬誌 **73**, 169 (1953)).
- 宮道悦男, 杉浦 衛: サリチル酸ナトリウム水溶液の安定剤について(薬剤部長会年報 **12**, 82 (1953)).
- 宮道悦男, 千田重男: 最近の抗凝固剤について(綜説)(本誌 **4**, 1 (1954)).
- 宮道悦男, 千田重男: **Ethylenediamine Tetraacetic Acid-2Na-Ca** 錯塩の合成について(本誌 **4**, 30 (1954)).

宮道悦男, 小瀬洋喜, 大竹正江: 有機化合物の生化学的還元(第2報)(本誌 **6**, 27 (1956)).

宮道悦男, 小瀬洋喜: 同上(第3報)(本誌 **6**, 31 (1956)).

(著 書)

宮道悦男: “植物成分研究法”(南山堂)(1935).

宮道悦男: “合成薬化学”(金原書店)(1941).

宮道悦男 中沢浩一: “有機合成化学”(広川書店)(1951).

宮道悦男, 嶋野 武: “動植物成分”(共立社)(1952).

嶋野 武

- 嶋野 武, 吉田 裕: 括楼及び王瓜の生薬学的研究(第1報)(薬誌 **58**, 240 (1938); 本誌, **1**, 4 (1951)).
- 嶋野 武, 窪田 力: 五加皮の成分研究(第1報)(本誌 **1**, 2 (1951)).
- 木村康一, 嶋野武, 原田利一: 黄連の剖見(第1報)北京市場品について(本誌 **2**, 17 (1952)).
- 嶋野 武, 野村新太郎: マンサク樹皮成分について(本誌 **2**, 21 (1952)).
- 木村康一, 嶋野 武, 原田利一: 黄連の生薬学的研究(第1報)中国市場の黄連(生薬 **6**, 19 (1952)).
- 嶋野 武, 野村新太郎: イブキジャコウソウの成分研究(第1報)精油成分(薬誌 **72**, 1648 (1952)).
- 嶋野 武, 野村新太郎, 山本正史: アゼムシロの成分研究(本誌 **3**, 12 (1953)).
- 嶋野 武, 小瀬洋喜: 黄蜀葵子の成分研究(第1報)(本誌 **3**, 15 (1953)).
- 嶋野 武, 滝 和子, 後藤慶子: カワラタケの成分について(本誌 **3**, 43 (1953)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 尾藤 正: マメハンミヨウ並びに類似昆虫のカンタリジン, 遊離アミノ酸について(本誌 **3**, 44 (1953)).
- 嶋野 武, 野村新太郎, 黒井 弘: 黄柏中よりベルベリン塩酸塩の抽出検討(本誌 **4**, 33 (1954)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 井関鈴子: 禾本科植物のフラボノイドの研究(予報)(本誌 **4**, 136 (1954)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫: テイカカズラの成分(予報)(本誌 **4**, 139 (1954)).

- 嶋野 武, 野村新太郎, 山川和男: 刻木通の異物について (本誌 5, 4 (1955)).
- 嶋野 武: 毛管分析を利用した粉末生薬試験法の研究 (文部省科学試験研究医薬品試験法の総合研究 1, 52 (1950)).
- 嶋野 武: 生薬毛管像の水酸化バリウムによる呈色理由の検討 (文部省科学試験研究植物成分の微量化学的研究 1, 32 (1951)).
- 嶋野 武: 同上 (文部省科学試験研究植物成分の微量化学的研究 2, 21 (1952)).
- 嶋野 武: 生薬毛管像の水酸化バリウムによる呈色機構 (文部省科学研究植物成分の微量化学的研究 3, 30 (1953)).
- 嶋野 武: 毛管像の水酸化バリウムによる呈色理由の検討 (文部省科学研究植物成分の微量化学的研究 4, 38 (1954)).
- 嶋野 武: サポニン類の検索 (植物成分の濾紙クロマトグラフィーによる検索 1, 21 (1955)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 大和新一郎: 円型濾紙クロマトグラフィーによる麻黄中のエフェドリン簡易定量法について (薬誌 76, 860 (1956)).
- 嶋野 武, 滝 和子, 東 光男: トリテルペノイドの研究 (第1報) トリテルペンの呈色反応について (本誌 5, 1 (1955)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 井上純男: 同上 (第4報) 濾紙微量電気泳動法によるトリテルペノイドの検討 (1) (本誌 5, 7 (1955)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 井上純男: 同上 (第5, 6報) 濾紙微量電気泳動法によるトリテルペノイドの検討 (その2) (本誌 6, 35 (1956)).
- 嶋野 武, 水野瑞夫, 足立郁夫: 同上 (第9報) 夏枯草の新成分について: ウルソール酸 (薬誌 76, 974 (1956)).
- 嶋野武, 水野瑞夫, 足立郁夫: 同上 (第10報) キソケイの新成分について: ウルソール酸, オレアノール酸 (薬誌 77, 1038 (1957)).
- 嶋野 武, 野村新太郎: 市販瞿麥子について (本誌 7, 46 (1957)).
- (著 書)
- 川中建雄, 嶋野 武: “動植物民間薬提要” (南江堂) (1936).
- 宮道悦男, 嶋野 武: “動植物成分” (共立社) (1952).

中 沢 浩 一

- 中沢浩一: レゾルシンの γ -置換誘導体に関する研究 (第1報) γ -レゾルシルアルデヒドの合成 (薬誌 59, 169 (1939)).
- 中沢浩一: 同上 (第2報) 3-ホルミルレズアセトフェノン, 3-アセチル- β -レゾルシルアルデヒド並びに2,3,6-トリオキシアセトフェノンの合成 (薬誌 59, 297 (1939)).
- 中沢浩一: 同上 (第3報) 5,6-ジメトキシフラボンの合成 (薬誌 59, 495 (1939)).
- 中沢浩一: 同上 (第4報) 5,6-ジオキシフラボンについて (薬誌 59, 521 (1939)).
- 中沢浩一: 同上 (第5報) **Primetin** (5,6-ジオキシフラボン) の合成 (薬誌 59, 524 (1939)).
- 中沢浩一: レゾルシンを母体とする薬剤の合成に関する研究 (第6報) ジヒドロレゾルシンの原料としての γ -アセチル酪酸エステル合成法について (薬誌 71, 178 (1951)).

- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第7報) γ -ブチリル酪酸エステルの新合成法 (薬誌 **71**, 802 (1951)).
- 中沢浩一, 松浦信: 同上 (第8報) 閉環によるジヒドロレゾルシン及び γ -エチルジヒドロレゾルシンの合成について (薬誌 **71**, 805 (1951)).
- 中沢浩一, 松浦信: 同上 (第9報) γ -*n*-ブチルジヒドロレゾルシンの合成及び γ -アルキルジヒドロレゾルシン類合成の総括 (薬誌 **72**, 51 (1952)).
- 中沢浩一, 松浦 信: フラボノイド及び近縁化合物の核置換体の合成研究 (第1報) アカセチン-7-メチルエーテルのクロルメチル化反応 その1, 2種のクロルメチル化合物の分離及びそれらの誘導体 (薬誌 **73**, 481 (1953)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第2報) アカセチン-7-メチルエーテルのクロルメチル化反応その2, mp 218° (decomp) のクロルメチル化合物の構造 (8-メチルアカセチン-7-メチルエーテルの合成) (薬誌 **73**, 484 (1953)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第3報) アカセチン-7-メチルエーテルのクロルメチル化反応 その3, mp 185° (decomp) のクロルメチル化合物の構造 (薬誌 **73**, 751 (1953)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第4報) 8-(*p*-ヒドロキシフェナシル)-5,7,4'-トリヒドロキシフラボンのメチルエーテル類の合成 (ギンクゲチン分解フラボンの化学構造について) (薬誌 **74**, 40 (1954)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第5報) 8-(β -アニソイルエチル)-5,7,4'-トリヒドロキシフラボンのメチルエーテル類の合成 (ギンクゲチン分解フラボンの化学構造について その2) (薬誌 **75**, 68 (1955)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第6報) 8-メチルアカセチン-5,7-ジメチルエーテル及び8-(β -カルボキシエチル)-5,7,4'-トリメトキシフラボンの新合成法 (薬誌 **75**, 467 (1955)).
- 中沢浩一, 坪内幸恵: 同上 (第7報) ギンクゲチン分解フラボンの化学構造について (その3) 6-(*p*-ヒドロキシフェナシル)-5,7,4'-トリヒドロキシフラボンのメチルエーテル類の合成 (薬誌 **75**, 716 (1955)).
- 中沢浩一, 坪内幸恵, 榎田康衛: 同上 (第8報) 6-アセチル-5,7,4'-トリメトキシフラボンの脱メチル化反応 (薬誌 **76**, 1204 (1956)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 縮合剤としてのポリリン酸の応用に関する研究 (第1報) カルボン酸によるフェノールのアシル化 (フェノールの新アシル化法) (薬誌 **74**, 69 (1954)).
- 中沢浩一, 松浦 信, 楠田貢典: 同上 (第2報) カルボン酸による石炭酸及びアニソールの核アシル化反応 (4-ヒドロキシー及び4-メトキシアシロフェノンの合成) (薬誌 **74**, 495 (1954)).
- 中沢浩一, 松浦 信, 楠田貢典: 同上 (第3報) 安息香酸及びモノヒドロキシ安息香酸によるフェノール化合物のアシル化 (薬誌 **74**, 498 (1954)).
- 中沢浩一: 同上 (第4報) カテコール, レゾルシン, レズアシロフェノン及びそれらのメチルエーテル類の核アシル化反応 (薬誌 **74**, 836 (1954)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 同上 (第5報) カルボン酸によるフロログルシン及びそのメチルエーテル類の核アシル化反応 (薬誌 **74**, 1254 (1954)).
- 中沢浩一, 坪内幸恵: 同上 (第6報) カルボン酸による α -ナフトールの核アシル化反応 (薬誌 **74**, 1256 (1954)).
- 中沢浩一, 楠田貢典: 同上 (第7報) カルボン酸の化学構造と石炭酸に関する核置換能力との関係 (薬誌**75**, 257 (1955)).

- 中沢浩一, 馬場茂雄: 同上(第8報)置換安息香酸による石炭酸のアシル化(薬誌 **75**, 378 (1955)).
- 中沢浩一, 春日井 昇: トロピン系アルカロイドに関する研究(第1報)ロート根より1-ヒヨスチアミンの一製造法(薬誌 **71**, 800 (1951)).
- 中沢浩一, 松浦 信: フロログルシン並びにC-メチルフロログルシンの製造(本誌 **4**, 92 (1954)).
- 中沢浩一, 奥田高千代: 医薬品の分子化合物に関する研究(第1報)フェノルスルファゾール系化合物の分子化合物(本誌 **4**, 94 (1954)).
- 中沢浩一: イテウ葉の一フラボン **Ginkugetin** の構造研究(薬誌 **61**, 174 (1941)).
- 中沢浩一: **Ginkugetin** の苛性カリ水溶液による分解に就いて(“イテウ葉のフラボン化合物 **Ginkugetin** の構造研究”補遺)(薬誌 **61**, 228 (1941)).
- 中沢浩一: イチヨウ葉のフラボン化合物ギンクゲチンの構造研究(本誌 **1**, 46 (1951)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 濃オルトリン酸によるカルコンのフラバノン閉環(薬誌 **75**, 469 (1955)).
- 中沢浩一, 松浦 信: 縮合剤としてのポリリン酸の利用研究(本誌 **3**, 45 (1953)).

(著 書)

- 中沢浩一: “有機化学文献の調べ方”(広川書店)(1948).
- 宮道悦男, 中沢浩一: “有機合成化学”(広川書店)(1951).

長 谷 川 謙 三

(著 書)

- 長谷川謙三: “Fifty Famous Stories”(博文堂)(1948).
- 長谷川謙三: “Stories from Arabian Nights”(博文堂)(1948).
- 長谷川謙三: “Æsop's Fables”(博文堂)(1948).
- 長谷川謙三: “Robinson Crusoe”(博文堂)(1948).
- 長谷川謙三: “Stories from Shakespeare”(博文堂)(1948).
- 長谷川謙三: “The Suicide Club”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “Gulliver's Travels”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “Tales from Grimm & Andersen”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “Greek Myths”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “Bible Stories”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “Uncle Tom's Cabin”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “King Arthur”(博文堂)(1949).
- 長谷川謙三: “New Arabian Nights with Introduction & Note”(新協社)(1953).
- 長谷川謙三: “A Few Crusted Characters with Introduction & Note”(開隆堂)(1953).
- 長谷川謙三: “Great Short Stories with Introduction & Note”(文芸社)(1954).
- 長谷川謙三: “Six Fine Pieces with Introduction & Note”(文芸社)(1957).

高 取 吉 太 郎

- 高取吉太郎, 上田晶国: 安息香酸フェニルに依るベンゾイル化(第1報)芳香族アミン及び異項環アミンのベンゾイル化(薬誌 **71**, 1373 (1951)).
- 高取吉太郎, 上田晶国: 同上(第2報)芳香族ズルフォンアミドのベンゾイル化(薬誌 **71**, 1377 (1951)).

- 高取吉太郎: 同上(第3報)安息香酸フェニル誘導体の分子内置換反応に就いて(薬誌 **73**, 548 (1953)).
- 高取吉太郎: 同上(第4報)置換基を有する安息香酸フェニルに依るベンゾイル化(薬誌 **73**, 810 (1953)).
- 高取吉太郎: ズルフォンアミド剤合成の研究(第1報)ロダン系ズルフォンアミドの合成(その1)(薬誌 **67**, 191 (1947)).
- 高取吉太郎, 西田日吉: 同上(第2報)ロダン系ズルフォンアミドの合成(その2)(薬誌 **70**, 271 (1950)).
- 高取吉太郎, 小瀬 慶: 同上(第3報)化学療法剤としてのロダン系ズルフォンアミド(薬誌 **72**, 111 (1952)).
- 高取吉太郎, 山田保雄, 高木 太, 奥田高千代: 同上(第4報) **N¹-Acylsulfanilamide** の合成に就いて(薬誌 **72**, 426 (1952)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: 同上(第5報) **N¹-3,4-Dimethylbenzoylsulfanilamid (Irgafen)** の合成に就いて(薬誌 **73**, 115 (1953)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: 同上(第6報) **N¹-3,4-Dimethylbenzoylsulfanilamid (Irgafen)** の合成に就いて(続報)(薬誌 **74**, 1120 (1954)).
- 高取吉太郎, 西田日吉: 2-アミノチアゾールのロダン化(第1報)(薬誌 **71**, 1367 (1951)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: サリチルアミドの合成に就いて(薬誌 **74**, 785 (1954)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: 3,4-ジメチルアニリン及び関連化合物の合成(薬誌 **75**, 881 (1955)).
- 高取吉太郎, 奥田高千代, 原 茂: *p*-**Hydroxybenzenesulfonamide** 誘導体合成の研究(第1報)(薬誌 **71**, 1371 (1951)).
- 高取吉太郎, 原 茂, 山田保雄: 同上(第2報)(本誌 **6**, 55 (1956)).
- 高取吉太郎, 西田日吉, 奥田高千代: ロダン系ズルフォンアミドの合成(本誌 **1**, 88 (1951)).
- 高取吉太郎, 山田保雄, 小瀬慶: 化学療法剤としてのロダン系ズルフォンアミド(本誌 **2**, 31 (1952)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: 樟脳或は **Fenchon** を原料とする3,4-ジメチル安息香酸の製法(本誌 **4**, 97 (1954)).
- 高取吉太郎, 瀬木紀男: **Colorimetric Determination of Bromine in the Marine Algae** (三重水産紀要 **1**, 209 (1952)).
- 高取吉太郎: ストレプトマイシン贋造品の簡易試験法(臨床 **4**, 95 (1951)).
- 高取吉太郎: 癌化学療法の見望(綜説)(本誌 **6**, 1 (1956)).
- 高取吉太郎, 浅野進吾: キアンメチン製造条件の検討について(本誌 **7**, 60 (1957)).
- 高取吉太郎, 山田保雄: *o*-トルイジンのズルフォン化について(本誌 **7**, 61 (1957)).

加 藤 好 夫

- 加藤好夫: スルファミン系化合物の合成と進歩(岐薬報国誌**11**, 6 (1940)).
- 加藤好夫: 医薬としての尿素(薬局 **1**, 358 (1950)).
- 加藤好夫: 防水剤について(薬局 **2**, 876 (1951)).
- 加藤好夫, 杉浦 衛: サリチル酸ナトリウム溶液の安定剤について(薬剤部長年報 **12**, 82 (1953)).
- 加藤好夫: ペニシリン点眼剤の安定化(薬剤部長年報 **13**, 67 (1954); 本誌 **3**, 25 (1953)).
- 加藤好夫, 杉浦 衛: ペプシン含有液剤の安定性について(薬剤部長年報 **13**, 92 (1954); 本誌 **3**, 31 (1953)).

加藤好夫, 杉浦 衛: ペプシン含有液剤の安定性について (続報) (薬剂部長年報 **14-2**, 60 (1954)).

加藤好夫: 界面活性剤の進歩 (綜説) (本誌 **4**, 4 (1954)).

加藤好夫: 薬剤の安定性について (薬局 **6**, 27 (1955)).

加藤好夫: ポリエチレングリコールアルキルエステルの合成とその製剤学的利用研究 (第1報) (薬剂部長年報 **15-4**, 204 (1955)).

加藤好夫, 杉浦 衛: ビタミンCの安定性の研究(第1報)微量金属の影響について (本誌 **6**, 59 (1956)).

加藤好夫, 杉浦 衛: ビタミンCの安定性の研究(第2報)ビタミンCの顆粒について (本誌 **6**, 62 (1956)).

大 野 武 男

大野武男: モノニトロフェノール類の水銀化反応に関する研究 (第1報) (薬誌 **76**, 713 (1956)).

大野武男: ジニトロフェノール類の水銀化反応に関する研究 (薬誌 **76**, 718 (1956)).

大野武男: ニトロナフトール類の水銀化反応に関する研究 (薬誌 **76**, 722 (1956)).

大野武男: ジハイドロオキシベンゼン類のニトロ誘導体の水銀化反応に関する研究 (薬誌 **76**, 726 (1956)).

大野武男: サリチル酸及び8-オキシキノリンのニトロ誘導体の水銀化反応に関する研究 (薬誌 **76**, 729 (1956)).

大野武男: **Dinitrohydroxyphthalein** 類の水銀化反応に関する研究 (薬誌 **76**, 733 (1956)).

千 田 重 男

千田重男: 最近の鎮痛剤及び鎮座剤の動向について (綜説) (本誌 **3**, 1 (1953)).

千田重男, 兼松 顕, 本多 真: ジフェニルアセトンの合成 (本誌 **5**, 20 (1955)).

林 領 一

林 領一, 木沢顕正: 本学学生の体格と脈搏の関係について (本誌 **4**, 113 (1954)).

佐 久 間 礼 三 郎

佐久間礼三郎, 戸田恭子, 小重寿郎, 加藤良彦: 屋内空気の汚染度に就いて (公衛年報 **4**, 122 (1956)).

佐久間礼三郎: 窯業珪肺の実態について (綜説) (本誌 **6**, 17 (1956)).

佐久間礼三郎: 放射性物質含有鉱物の食品に対する作用について (第1報) (本誌 **7**, 63 (1957)).

鍛 冶 健 司

鍛冶健司, 長島 弘: インドール系アミン誘導体の合成研究 (薬誌 **72**, 1589 (1952); 本誌 **3**, 35 (1953)).

鍛冶健司, 長島 弘: チアツオール誘導体の合成研究 (第1報) (薬誌 **75**, 438 (1955)).

鍛冶健司, 長島弘: 混合アシロイン類の合成研究 (第1報) 芳香族アルデヒドシアンヒドリンに対するアルキル **Grignard** 試薬の反応 (薬誌 **76**, 1247 (1956)).

鍛冶健司, 長島 弘: 同上(第2報) 芳香族アルデヒドシアンヒドリンイミノエステルに対する **Grignard** 試薬の新反応 (薬誌 **76**, 1250 (1956)).

鍛冶健司, 長島 弘: 同上 (第3報) メトキシマンデル酸ニトリル類に対するメチル **Grignard** 試薬の反応 (薬誌 **76**, 1371 (1956)).

鍛冶健司: 同上 (第4報) 芳香族アルデヒドシアンヒドリン類に対する **Methylmagnesium Iodide** の反応に及ぼす芳香環の構造の影響 (薬誌 **77**, 851 (1957)).

鍛冶健司: 同上 (第5報) マンデル酸関連化合物に対する MeMgI の反応 (薬誌 77, 855 (1957)).

鍛冶健司: 同上 (第6報) 脂環ケトンシアンヒドリン類に対する Grignard 試薬の反応 (薬誌 77, 858 (1957)).

鍛冶健司: 最近の Grignard 反応に関する研究 (綜説) (その1) (本誌 7, 1 (1957)).

吉 田 甚 吉

吉田甚吉: Wright Christian 著 Public Relations in Management の紹介批判 (名城商学 1, No.3, 107 (1951)).

吉田甚吉: 我国医薬品工業の特殊性について (経営学論集 24, 247 (1952)).

吉田甚吉: アメリカに於ける労使協力について (名城商学 3, No.1, 41 (1954)).

吉田甚吉: 医薬品の流通と医薬品商業経営について (経営学論集 26, 357 (1954)).

吉田甚吉: 薬業経済論の構想 (本誌 4, 125 (1954)).

吉田甚吉, 宮田英雄, 信田 力: 岐阜市に於ける薬局の実態調査—主として薬局の位置と経営との関連に於いて (本誌 4, 116 (1954)).

吉田甚吉: 配置家庭薬の現況について (本誌 5, 35 (1955)).

吉田甚吉: 価格維持と薬業 (綜説) (本誌 7, 32 (1957)).

河 辺 実

河辺 実: PAEQNIA Über die Namen der Heilpflanzen (本誌 4, 129 (1954)).

河辺 実: Das moderne System in der Theorie des Artikels (本誌 5, 43 (1955)).

河辺 実: Gebrauch des bestimmten Artikels Eigennamen (本誌 6, (人-1) (1956)).

広 瀬 一 雄

広瀬一雄, 北村二郎, 青木威樹: テオールサリチル酸アリルエステルの合成 (本誌 4, 111 (1954)).

広瀬一雄, 北村二郎, 小瀬洋喜, 三島としえ: キノン系化合物の抗菌性作用機序に関する研究 (第5報) キノン系化合物の化学構造と抗菌性 (その3) ベンゾキノン機能誘導体の化学構造と抗菌性 (本誌 5, 24 (1955)).

広瀬一雄, 小瀬洋喜, 北村二郎, 山中好子: 有機化合物の生化学的還元 (第1報) (本誌 5, 26 (1955)).

広瀬一雄, 小瀬洋喜, 北村二郎: 抗酸化剤の抗菌作用について (本誌 6, 66 (1956)).

広瀬一雄, 小瀬洋喜, 北村二郎: 植物ホルモンの抗菌作用について (本誌 7, 64 (1957)).

(著 書)

広瀬一雄: “Chemische Wortschatz” (大学書林) (1941).

沢 登 定 教

沢登定教: 法社会学について (I) (本誌 2, 41 (1952)).

沢登定教: 法社会学の一面 (本誌 4, 131 (1954)).

沢登定教: 法社会学の一面 (社会学評論 5, No.3, 92 (1955)).

奥 田 高 千 代

奥田高千代, 北村二郎, 味香喜代子: p-Aminothiobenzamide 誘導体の抗菌性 (第1報) 合成と試験管内抗菌力試験 (本誌 5, 29 (1955)).

奥田高千代: アルキル化剤としての Mannich 塩基に就いて (第1報) パラ置換 β -Dimethylaminopropiophenone と Morpholine との交換反応 (薬誌 76, 1 (1956)).

奥田高千代: 同上 (第2報) パラ置換 β -Dimethylaminopropiophenone と Piperidine との交換反応 (薬誌 76, 4 (1956)).

奥田高千代, 小川昌三: 同上 (第3報) 2-Acetamidothiazole 類の Mannich 反応 (薬誌 77, 445 (1957)).

奥田高千代, 黒宮喜美子: 同上 (第4報) 2-Acetamidothiazole 類の Mannich 塩基によるアルキル化反応 (薬誌 77, 448 (1957)).

石 黒 伊 三 雄

石黒伊三雄: アイソトープの利用について (綜説) (本誌 7, 21 (1957)).

松 浦 信

松浦 信: 活性メチレン化合物とホルムアルデヒドとの縮合反応 (第1報) (薬誌 71, 525 (1951)).

松浦 信: 濃オルトリン酸によるカルコンのフラバノン閉環 (第2報) フロログルシンモノメチルエーテル系カルコン類の閉環 (薬誌 77, 296 (1957)).

松浦 信: 同上 (第3報) フェノール系並びにレゾルシン系カルコン類の閉環 (薬誌 77, 298 (1957)).

松浦 信: 同上 (第4報) フロログルシンベンジルエーテル系カルコン類の閉環 (薬誌 77, 302 (1957)).

松浦 信: 同上 (第5報) ポンカネチンの構造について (薬誌 77, 328 (1952)).

松浦 信, 松浦 暘: 2'-Hydroxy-3'-(及び5')acetyl-4,4'-dimethoxychalcone の合成 (薬誌 77, 330 (1957)).

松浦 信: ポンカネチンの構造について (補遺) (薬誌 77, 702 (1957)).

Shin Matsuura: The Structure of Cryptostrobin and Strobopin, the Flavanones from the Heartwood of *Pinus strobus* (*Pharm. Bull.* 5, 195 (1957)).

豊 吉 一 美

豊吉一美: 酢酸フェニル水銀製造条件の検討 (第1報) (本誌 6, 67 (1956)).

豊吉一美: 同上 (第2報) (本誌 6, 68 (1956)).

小 瀬 洋 喜

小瀬洋喜: 植物ホルモンの合成研究 (第1報) (農化誌 22, 104 (1948)).

小瀬洋喜: 同上 (第2報) (岐短大紀要 1, 64 (1951)).

小瀬洋喜: 抗菌性物質としてのキノン系化合物に関する研究 (本誌 5, 46 (1955)).

小瀬洋喜, 桑山敬一, 後藤礼司, 橋本紀男: 学童の食物嗜好に関する調査 (第1報) (公衆衛生年報 3-(1), 59 (1955)).

小瀬洋喜: 食品栄養費表の提唱 (薬局 6, 19 (1955)).

小瀬洋喜, 石渡和子: 白川村大家族の栄養調査 (越飛文化 5, 10 (1957)).

小瀬洋喜, 高井富美子: 調理の基礎的研究 (第1報) (岐女短大紀要 6, 1 (1957)).

(著 書)

小瀬洋喜: “飛驒白川村の食生活” (岐阜短期大学) (1952).

小瀬洋喜: “一般教育化学”(創研社)(1956).

小瀬洋喜, 高井富美子: “調理学要論”(コロナ社)(1957).

小瀬洋喜: “学校給食の基本的問題”(大垣市学校保健会)(1957).

北 村 二 朗

北村二郎, 奥田高千代: **p-Aminothiobenzamide** 誘導体の抗菌性(第2報)(本誌 **5**, 33 (1955)).

北村二郎, 栗本珍彦, 横山復次: 黒変米菌代謝産物について(薬誌 **76**, 972 (1956)).

北村二郎, 新井幸子, 岡田喬子: 黒変米菌代謝産物について(第2報)(本誌 **6**, 70 (1956)).

II 旧 職 員 の 部

赤 木 満 洲 雄

赤木満洲雄: クロカワの色素成分研究(第1報)色素 **Leucomelon** に就いて(薬誌 **62**, 129 (1942); 本誌 **1**, 16 (1951)).

赤木満洲雄: 同上(第2報) **Leucomelon** の合成(薬誌 **62**, 202 (1942); 本誌 **1**, 22 (1951)).

赤木満洲雄, 広瀬一雄: アリルヒノン類の研究(第1報) **N-Nitrosoacetyl-arylamine** に依るヒノンのアリル化に就いて(薬誌 **62**, 191 (1942)).

赤木満洲雄: 同上(第2報) **N-Nitrosoacetyl-arylamine** の応用によるポリポール酸色素の合成(薬誌 **62**, 195 (1942)).

赤木満洲雄: 同上(第3報) **N-Nitrosoacetyl-arylamine** の応用による不斉型ポリポール酸色素の合成(薬誌 **62**, 199 (1942)).

赤木満洲雄: 抗酸化剤について(綜説)(主として抗酸化作用と化学構造との関連において)(本誌 **2**, 1 (1952)).

赤木満洲雄, 青木 勇: パーマネント用薬品の試験法(本誌 **3**, 17 (1953)).

赤木満洲雄, 広瀬一雄, 渡辺周一, 小瀬洋喜: キノン系化合物の抗菌性作用機序に関する研究(第1報)キノン系化合物の化学構造と抗菌性(その1)アリルベンゾキノン類の化学構造と抗菌性(本誌 **4**, 35 (1954)).

赤木満洲雄, 広瀬一雄, 小瀬洋喜, 天野純二: 同上(第2報)キノン系化合物の抗菌性に対する諸種化合物の影響(その1)キノン系化合物の抗菌性に対する表面活性剤の影響(本誌 **4**, 41 (1954)).

(著 書)

赤木満洲雄: “化粧品化学”(南山堂)(1952).

新 延 信 吉

緒方 章, 新延信吉: **Benzhydrylamine** 及び **Benzyl-phenäthylamine** 系化合物の局所麻酔性と構造との関係について(第1報)(薬誌 **56**, 497 (1936)).

緒方 章, 新延信吉: 局所麻酔性を有するアミノ化合物の研究(第2報)第一級 **Diphenylalkylamine** の局所麻酔性に就いて(薬誌 **62**, 152 (1942)).

緒方 章, 新延信吉: 同上(第3報) **Hydrobenzhydrylamine** の局所麻酔性に就いて(薬誌 **62**, 160 (1942)).

緒方 章, 新延信吉: 同上(第4報) **Homobenzhydrylamine** の局所麻酔性に就いて(薬誌 **62**, 372 (1942)).

新延信吉： 同上（第5報）第一級アルキルアミン及び第一級モノフェニルアミンに就いて並に第一級アミノ化合物の構造と局所麻酔作用との関係に就いて（薬誌 63, 204 (1943)）.

伊 藤 四 十 二

緒方 章, 伊藤四十二： 男性ホルモンの研究（第12報）男性ホルモン作用増強性物質の研究 その3（薬誌 63, 477 (1943)）.

松 野 俊 雄

近藤平三郎, 松野俊雄： *Stephania rotunda Loureiro* 根のアルカロイド Rotundin に就いて（第1報）（防己科植物アルカロイド研究 第72報）（薬誌 64, 乙号, 113 (1944)）.

松野俊雄： 同上（第2報）（防己科植物アルカロイド研究 第73報）（薬誌 64, 乙号, 274 (1944)）.

堀 井 善 一

堀井善一： ロダン尿素誘導体の合成的研究（薬誌 55, 14 (1935)）.

堀井善一： ω -Chloracetobrenzcatechin よりの Thiazol 誘導体（薬誌 55, 21 (1935)）.

長 瀬 雄 三

長瀬雄三, 大野武男, 後藤俊夫： フルオレスセインの化学構造に関する知見（第1報）溶液における構造の考察（薬誌 73, 1033 (1953)）.

長瀬雄三, 大野武男, 後藤俊夫： 同上（第2報）固態における構造の考察（薬誌 73, 1039 (1953)）.

長瀬雄三, 大野武男： ジブロムフルオレスセインの水銀化合物に関する研究（第1報）ジブロムフルオレスセインの水銀化反応について（薬誌 73, 1337 (1953)）.

長瀬雄三, 大野武男： 同上（第2報）水銀化合物の構造について（薬誌 73, 1340 (1953)）.

長瀬雄三, 井口正信, 井口蓉子： 同上（第3報）マーキュロクロムのクロマトグラフィー及びポーラログラフィーによる検討（薬誌 77, 837 (1957)）.

長瀬雄三, 松本 潮： 過酸化水素水によるナフトールのアルカリ性酸化に就いて（薬誌 74, 9 (1954)）.

長瀬雄三, 井口正信： デルマトール及びその近縁物質のポーラログラフィー（薬誌 77, 832 (1957)）.

長瀬雄三： 8-Oxychinolin の水銀化合物に就いて（分析と試薬 2, 163 (1947)；本誌 1, 26 (1951)）.

長瀬雄三： Baubigny-Chavanne 法による Cl, Br の少量分析法について（分析と試薬 3, 51 (1949)）.

長瀬雄三, 大野武男： マーキュロクロム製造条件の検討（薬学研究 20, 261 (1948), 本誌 1, 30 (1951)）.

長瀬雄三, 大野武男, 福田一夫： 避妊薬中の主薬の定量法について（薬剤部長会年報 11, 134 (1952)）.

長瀬雄三, 大野武男, 井口正信： マーキュロクロムのペーパークロマトグラフと市販品の品質試験に就いて（第1報）（薬剤部長会年報 12, 120 (1953)）.

長瀬雄三, 大野武男, 矢島寛子： 同上（第2報）（薬剤部長会年報 14, 76 (1954)）.

長瀬雄三, 大野武男, 松本 潮： フタレイン系誘導体の水銀化合物に関する研究（第3報）マーキュロクロムにおける臭素の位置について（本誌 2, 24 (1952)）.

長瀬雄三： 8-Hydroxyquinoline azo 化合物の分析試薬への応用（本誌 3, 20 (1953)）.

長瀬雄三, 松本 潮, 佐竹幸夫： Phenolsulfonphthalein のニトロ化に就いて 3,3'-Dinitrophenolsulfonphthalein の合成（本誌 4, 44 (1954)）.

長瀬雄三, 河合 洋: イオン交換樹脂に対するpH指示薬の行動とそのpH測定への応用 (本誌 4, 50 (1954)).

長瀬雄三, 松本 潮: スチルベン系アゾ色素によるマグネシウムの検出について (本誌 5, 12 (1955)).

長瀬雄三, 松本潮, 高木大義, 高田広身: ナフタリン-1,6-ジスルホン酸の製造について ナフタリンのジスルホン化による方法の検討 (本誌 6, 40 (1956)).

長瀬雄三, 松本 潮, 高田広身, 高木大義: 1,6-ジヒドロキシナフタリンの製造について ナフタリン-1,6-ジスルホン酸のアルカリ熔融による方法の検討 (本誌 6, 45 (1956)).

長瀬雄三, 小木曾真寿美: アミノプロピロンの定量法について (本誌 6, 50 (1956)).

長瀬雄三, 松本 潮, 和泉 徹: 二, 三のピリジンカルボン酸類の金属イオンとの反応性について (本誌 7, 53 (1957)).

(著 書)

高木誠司, 上田武雄, 長瀬雄三: “薬品分析化学 (薬学大全書 第2巻)” (非凡閣) (1940).

長瀬雄三, 神谷金剛: “物理化学汎論 (基礎物理学編)” (広川書店) (1943).

三 箇 清

三箇 清: 文化史的に見た独逸語の研究 (本誌 1, 94 (1951)).

大 野 節 郎

大野節郎, 児嶋妙子: スクラップ法に依るキノリン核合成に関する知見 (第1報) ベンゾール核に他の置換基の無い場合 (薬誌 64, 232 (1944)).

大野節郎, 児嶋妙子: 生活要素としての酸 (第4報) 牛肝臓の増血成分の研究 その1 (薬誌 64, 乙号, 166 (1944)).

大野節郎, 児嶋妙子: 同上 (第5報) 牛肝臓の増血成分の研究: その2 (薬誌 64, 乙号, 343 (1944)).

横 山 復 次

横山復次, 栗原藤三郎, 宮原 顕, 北村二郎, 岩田清法: チオウレタン誘導体の合成及び駆虫性について (本誌 1, 36 (1951)).

横山復次, 岩田清法: 局所麻酔剤の研究 (第1報) アルコキシナフチルアミン誘導体について その1 (本誌 3, 23 (1953)).

横山復次, 松原仙吉: ペーパークロマトグラフィーを応用した色素分析法 (第1法) (本誌 4, 55 (1954)).

横山復次, 岩田清法: 局所麻酔剤の研究 (第2報) アルコキシナフチルアミン誘導体について その2 (本誌 5, 19 (1955)).

吉 田 裕

吉田 裕: *Hamamelis* 属植物葉の生薬学的研究 (第1報) (薬誌 59, 582 (1939)).

吉田 裕: 同上 (第2報) (薬誌 59, 656 (1939)).

吉田 裕: 同上 (第3報) マンサクタンニンの含有量に関する研究 (その2) (薬誌 61, 431 (1941)).

吉田 裕: 同上 (第4報) マンサクタンニンの含有量に関する研究 (その3) (薬誌 61, 437 (1941)).

吉田 裕: タンニン液の測定に関する研究 (薬誌 63, 558 (1943)).

吉田 裕, 安藤 進: マンサクタンニンの含有量に関する研究 (第4報) (薬誌63, 567 (1943)).

吉田 裕： 括楼及び王瓜の生薬学的研究（第2報）（薬誌 61, 169 (1941)）.

吉田 裕： 同上（第3報）（薬誌 63, 659 (1943)）.

栗原 藤三郎

栗原藤三郎： 竹材の乾溜に就いて（薬誌 63, 330 (1943)）.

栗原藤三郎： モノヘテロダイフェニレン化合物の研究（第1報）カルバツオール誘導体の研究（本誌 1, 56 (1951)）.

栗原藤三郎： 同上（第2報）カルバツオールのニトロ化（本誌 1, 66 (1951)）.

栗原藤三郎, 丹羽弘司： 同上（第3報）カルバツオール誘導体の電解還元（本誌 1, 70 (1951)）.

栗原藤三郎： 同上（第4報）カルバツオール-9-ヒドラチン誘導体の合成（本誌 1, 74 (1951)）.

栗原藤三郎： 同上（第5報）カルバツオールのスルホン化について（本誌 1, 76 (1951)）.

栗原藤三郎, 丹羽弘司： 同上（第6報）カルバツオールのハロゲン化について（本誌 1, 83 (1951)）.

栗原藤三郎： 同上（第7報）カルバツオール誘導体の合成（本誌 1, 85 (1951)）.

栗原藤三郎, 丹羽弘司： ギベンゾチオフエン及びS-オキシドの生成に関する知見（本誌 2, 29 (1952)）.

原 田 利 一

原田利一： 細辛の剖見（薬誌 70, 277 (1950); 本誌 2, 39 (1952)）.

原田利一： シダ類の薬学的知見（第1報）フロログルシド含有シダ類の顕微化学的検索（薬誌 71, 506 (1951); 本誌 2, 40 (1952)）.

原田利一： 同上（第2報）フロログルシド含有シダ類の剖見（第1報）（薬誌 71, 508 (1951)）.

Toshikazu Harada: *Pharmaceutical Studies on Ferns, III.* (薬誌 72, 153 (1952)).

原田利一： シダ類の薬学的知見（第4報）フロログルシド含有シダ類の剖見 その2（薬誌 72, 323 (1952); 本誌 2, 40 (1953)）.

原田利一, 水野瑞夫, 加藤智雄： キノコ類の抗菌性について（第1報）サルノコシカケ科に属するキノコ類の抗菌力試験（薬誌 72, 591 (1952)）.

Toshikazu Harada: *Pharmaceutical Studies on Ferns, V. Quantitative Determination of Crude Filicin.* (薬誌 72, 1384 (1952)).

原田利一, 加藤智雄： タマサキツヅラフチ施肥条件の検討（本誌 3, 38 (1953)）.